

追悼伊藤隆先生

マルクス主義支配の歴史学界を憂える

伊藤 隆（東京大学名誉教授）
江崎 道朗（評論家）

伊藤隆先生との対談の転載にあたって（本研究会副会長・麗澤大学客員教授 江崎道朗）

日本近現代政治史研究の第一人者として知られる、歴史学者で東京大名誉教授の伊藤隆先生が令和6年8月19日、お亡くなりになった。

伊藤先生の晩年、個人的にご指導をいただいたご縁があったことから、『歴史認識問題研究』第15号に「伊藤隆先生からの宿題」と題した追悼文を書かせていただいた。この追悼文では、『月刊正論』令和3年2月号に「マルクス主義支配の歴史学界を憂える」と題して掲載された、伊藤先生と私の対談のことを取り上げた。

この『月刊正論』の対談において、伊藤先生は大別して三つの課題を指摘された。

第一に、マルクス主義的な歴史研究、東京裁判史観の問題点だ。

第二に、冷戦終結後に情報公開された外国の公文書を踏まえた、近現代史研究の必要性だ。

第三が、視座なき実証主義でいいのか、ということだ。

これらの課題は、歴史認識問題に取り組む私どもこそ、重く受け止めるべきではないかということから、今回『月刊正論』編集部のご了解を得て、全文転載させていただくこととした。ご一読賜れば幸いです。

江崎 伊藤先生のご著書『歴史と私』（中公新書）には、我が国の近現代史研究の基盤を構築された、これまでの先生の足跡が克明に記されています。

戦後の歴史研究、歴史教育は、マルクス主義に基づく、階級闘争史観や発展段階説による思考に支配されてしまっていました。そうしたなかで、マルクス主義の歴史観に代わる新しい枠組みを提示されただけでなく、木戸幸一、佐藤栄作、重光葵、鳩山一郎らの日記や手紙を始めとする、膨大な史料を収集・発刊され、多くの重要人物に対して聞き取り調査をしてこられました。伊藤先生のおかげで特定のイデオロギーに囚われることなく、史料に基づいた近現代史研究ができるようになってきているのですが、その意義が必ずしも理解されていないように見えます。

伊藤 私は独りぼっちというか、あまり付き合いがいいほうでもないですからね。ですが、いま江崎さんが指摘されたように、日本の歴史研究は、一貫してずっとマルクス主義的な歴史研究に傾斜してしまっていることは確かです。平成25年の話です。

私は『史学雑誌』という東大の史学会が出している雑誌に、「『東京裁判史観』を想う」と題する文章を寄稿したことがありました。

戦争にかかわる苦難や窮乏など、すべての災厄が全て日本の「軍国主義者」が悪かった|という図式に押し込められてしまう「東京裁判史観」によって、太平洋の覇権をめぐる日米の対立や、日本と対立した中国を援助した米国との対立といった側面はほとんど無視されている。また、日米対立には人種対立の側面もあります。江崎さんが『日本は誰と戦ったのか』で追及された、コミンテルンの秘密工作も重要です。アメリカでは米国史の大家、チャールズ・A・ビアードが『ルーズベルトの責任—日米戦争はなぜ始まったか』が昭和33年に刊行されましたが、これが日本に紹介されたのは、何と平成23年でした。

「なぜ日本は戦争をしたか」という一点だけでも、これだけさまざまな研究がなされ、色々な問題提起が出ているのに、それらは決まって日本内部の要因のみに限定されて、アメリカやコミンテルンによる要因は直視されていない。見えないのではなく、見たくないのです。GHQ(連合軍総司令部)と親和性の強かった日本の共産主義者が、日本史研究や教育現場に大きな影響力を持って、旧態依然としているからです。最後に私はこう書きました。

《私は最近見る多くの近代史研究が、上述のような環境の中で一般化した史観(「東京裁判史観」)に基づいていると感じている。占領期に形成され、その教育を受けてきた世代が学会の中堅を構成していることを考えると当然かもしれないが、遺憾に感じているのは私一人ではないであろう》

後で聞いた話では、この文章を雑誌に掲載するか大問題になったそうです。最終的には無視はできず、掲載はされましたが、私の文章へのコメントなどは一切なかった。反論すれば議論になるから、それもない。なるべく触れないようにしている。そんな感じですから、私は孤高の人になってしまうのかもしれない。

ただ、東大の史学会は学界の中では比較的公正で、実証主義的な研究者が多い団体なんですよ。「どうとうそうなったか」というのが偽らざる感慨でした。もちろん、これは象徴的な出来事に過ぎませんが、戦前から戦後、現在に至るまでマルクス主義的な研究者組織の支配は、一貫して続いています。

江崎 日本は、欧米諸国の動きと逆行していますね。というのも1991年のソ連崩壊後、欧米諸国ではマルクス主義史観やソ連・共産主義体制に対する疑問を呈する方向で、近現代史研究が進んできているからです。

第二次世界大戦において、ソ連はナチス・ドイツを打ち破った「正義」の側と見なされましたが、ソ連崩壊後は、ソ連や共産主義体制における戦争犯罪を正面から取り上げようという機運が、東欧諸国を中心に盛り上がっています。大戦勃発八十年にあたる2019年9月19日、欧州議会で「欧州の未来に向けた重要な欧州の記憶」と題する決議が可決されました。ソ連は第二次世界大戦を始めた侵略国家であって、そのソ連を正義の側に位置付けたニュルンベルク裁判は間違いだとしている。事実上、戦勝国史観を修正しているんです。

アメリカでも、国家安全保障局（NSA）がソ連の対米秘密工作について明らかにした「ヴェノナ文書」が公開され、ルーズベルト政権にソ連や中国共産党の工作員が潜り込み、日米戦争へ誘導したのではないか、という視点で研究が進められています。ところが、日本では反応に乏しい。

私の議論を先生が目留めて下さっているのは有難い限りです。先生が書かれた『シリーズ日本の近代—日本の内と外』（中公文庫）を改めて読み返しましたが、先生の問題意識がひしひしと感じられました。

伊藤 分かったでしょう？

江崎 『シリーズ日本の近代—日本の内と外』では、国際共産主義と近代日本、特にロシア革命からソ連崩壊までの歴史を追いつつ、二十世紀に人類が経験した壮大な実験である共産主義に日本人がどう接してきたのかが、詳細に描かれ、論じられています。マルクス主義に支配された日本の歴史学界のなかで、先生がどのような思いを込めて執筆に尽力されたか、それを考えると実に刺激的でした。

伊藤 昭和から平成に変わる時期に、ソ連が崩壊したでしょう。あのとき左翼の人たちの研究論文の引用文献から、マルクスやレーニン、スターリン、毛沢東など共産主義者の名前が一斉に消えました。彼らは今も大人しくなり、私に反論もしなければ、たいした議論もせずに過ごしている。「ヴェノナ文書」など存在を今も見ようとしていないんですよ。でも探ると、やはりマルクス主義に根差している。

『シリーズ日本の近代—日本の内と外』で私は、第一次世界大戦終了を境に、日本の独立を獲得する戦いと、マルクス主義との戦いに分けて書きました。ですが、江崎さんの著書を読んで、「これはなんとかしなければならぬ」「補足しなければならぬ」という考えになりました。ソ連崩壊で世界的な構造が変わったわけじゃないんですよ。

江崎 確かにソ連は1991年に崩壊した。「ソ連崩壊で国際共産主義の脅威は過去の遺物になった」と日本ではよく言われますが、中国共産党政権の台頭、そしてアメリカ国内でも社会主義、共産主義に共鳴する動きが顕在化してきていて、共産主義の脅威は依然として続いている。

伊藤 東アジアでは中国、北朝鮮、ベトナム、当時はまだキューバもありました。これらが存在感を高めつつある。ひそかに忍び込んで、今やいつどうなるか分からない状態でしょう。暗澹たる思いです。中国がマルクス主義をどこまで本気で信奉しているか定かではありませんが、マルクス主義に基づく独裁体制だけは、第一次世界大戦以後ずっと続いている。その構造は変わってない。

マルクス主義の呪縛から逃れる難しさ

江崎 なぜ、日本の歴史研究や歴史教育は、マルクス主義の影響から抜け出せないのでしょうか。

伊藤 マルクス主義者やマルクス主義に影響を受けている人たちは、それが物の見方の軸になっているわけです。これを失ったら頼るものが何も無い。捨てたら別の見方があるわけじゃなく、視座を自分でつくらなければいけない。私だって若いころ、非常に苦労した経験がありますが、なんとなく「これでどうか」と考えていく以外ない。

ただ、多くの人たちはそれをやっておらず、逃げていると言わざるをえない。「実証主義」に走る人もいて、非常に細かな問題は扱うのですが、ではそれが歴史研究のなかで、どこにどうつながっているのかが分からない、という話になる。そういう論文がいっぱいありますよ。

「実証主義」だろうが、何だろうが、歴史的な事実をどういう枠組みで見るか、どういう連続性の中で見るか、国際的な目線やあるいは国内的な目線で見るとか、いずれにせよ視座や、よって立つ論理がないと説明が付かないし、実証研究など成り立たないんです。ただ、「こういう資料がありました」「こういう事実があった」で終わってしまう。非常に厳しいのです。

江崎 ご著書の『昭和初期政治史研究』（東京大学出版会）で先生は、マルクス主義に基づく発展段階説などに代わって、新しい枠組みを示されました。「漸新（現状維持）」か「革新（破壊）」かと、「復古（反動）」か「進歩（欧化）」かという二つの座標軸によって当時の政治を分析・検証し、「大正デモクラシー時代」「ファシズム時代」といった時代区分に疑義を投げかけられました。

この枠組みは、伊藤先生が学生時代から懇意にされていた佐藤誠三郎先生（東大名誉教授、故人）たちとの議論から生まれたのでしょうか。

伊藤 いや、必ずしもそうでもないんです。あれは私が勝手につくったものです。学生諸君に私は、「君たちにこの枠組みを強制するつもりは毛頭ない。枠組みは自分でつくらなければ駄目だ」というんです。修正でも打破でも何でもいい。「そういう気構えがないと、一人前の学者になれないよ」と言いますが、やった人はいませんね。

江崎 現在の近現代史研究を見ていると、結局はマルクス主義の垂流の枠組みに引きずられてしまっていて、「戦前の日本は帝国主義で、帝国主義日本の悪を摘出し、明らかにすることが自由と民主主義を守ることだ」という枠組みにとどまっているように見えます。

伊藤 そうです。今、江崎さんが述べたような日本の戦前の悪をほじくり出して、それを実証主義とっていたりする。初めから結論が決まっているんです。それをいかにして歴史的な記録から拾い出すかという話です。繰り返しますが、歴史事象を位置付けるには視座がないと書けない。だけど、「いい」か「悪い」は誰でも書けるんです。あの当時、「朝鮮を支配したのは悪かった」「どんな悪いことをしたか」なんて、探せば何か見つかるに決まっていますから、誰でも書ける。でもそれではダメで、結局は歴史の判断基準をマルクス主義に頼ってしまうことになる。自分でつくろうとしている人はあまりいないですよ。

江崎 戦前の日本を悪だと断罪する、いわゆる東京裁判史観から脱却するうえでも、伊藤先生が提示された、「漸新（現状維持）」か「革新（破壊）」かと、「復古（反動）」か「進歩（欧化）」かという、二つの座標軸によって当時の政治を分析する視座、枠組みは極めて重要なのですが、日本の歴史学界での受け止め方はどうだったのでしょうか。

伊藤 議論にもなりません。例えば、ファシズムという言葉を使うか、使わないかという議論はありましたよ。最終的には「無理にファシズムと言わなくてもいい」と誰かリーダーが言って、それで決着がついてしまう。最近、また「ファシズム」という言葉を使う本も出てきましたが、私は「イタリアに行け」と思っています。戦前の

日本にも右翼による政治テロや右翼運動はありましたが、ドイツやイタリアのように、右翼が国内を席卷し、制覇したわけではありませんからね。

江崎 その一方で、戦前の日本の「革新」派、特に近衛新体制の動きに、国際共産主義の影響があったように思いますが。

伊藤 そこは触れたくないんですよ。「革新官僚」ってマルクス主義者の「転向者」が多いでしょう。それが「近衛新体制」につながる流れだった。世界恐慌から来た情勢不安のなかで、ソ連やナチス・ドイツ、イタリアなどの挙国一致体制を敷いた国々が経済成長している、だから日本も私有財産を廃止し、全体主義こそが今後の世界の指針になりうる、バスに乗り遅れるな、となった。新体制運動を主導した近衛文麿を支えた、昭和研究会や国策研究会のメンバーの人たちの多くが転向組でしょう。なかでも私が一番印象的だったのは、和田耕作さんでしたが。

江崎 戦前は共産党、戦中期は革新官僚、戦後は民社党と歩んだ政治家ですね。

伊藤 そう。彼とは長い付き合いでね。亡くなられる数日前までインタビューをやって、最後は「ありがとう。これでもうこの世、おさらば」という手紙までいただきました。彼も転向者ですが、転向後も心の中ではずっと、「将来の世界は共産主義になる」と考えていたそうです。満洲で終戦を迎えた時も「もう一度、共産党に入っていい」と思っていた。ですが、五年間に及ぶソ連抑留生活を味わい、そこで現実のソ連を見た。それで、もう一度完全に転向した。そして戦後は一貫して民主社会主義の立場で反共を貫かれたんです。

近衛新体制につながる流れの中には、ゾルゲ事件の首謀者、尾崎秀実もいます。彼はマルクス主義者でしたが、同時に近衛新体制の推進者で、近衛のブレーンとなり、ナショナリストの顔をしていました。昭和研究会や国策研究会には、他にも尾崎のような、コミンテルンとつながっている人物がいたはずという印象は持っていますが、実証ができない。

江崎 私は、昭和研究会の事務局にいた河合徹という、転向組の人物に対する検事調書を読んだことがあります。そこには、日本を敗戦に追い込むべく、昭和研究会で暗躍していたことが赤裸々に書かれています。

インテリジェンス機関に欠かせないもの

伊藤 そうですか。ところでソ連崩壊後、機密情報が一時期公開されたでしょう。あれって今は閉ざされてしまったんですか。

江崎 ソ連共産党の対外秘密工作に関する機密文書群は「リッツキドニー文書」と総称されていて、公開されたのはエリツィン政権の時だけで、その後、非公開になってしまいました。ただ、その間に膨大なコピーが欧米に流出し、その研究はいまも欧米諸国では進んでいます。

なぜ、こうした研究が大事なのか。私が会った米軍のインテリジェンス関係者たちは、「中国共産党の秘密工作に対抗するためには、ソ連やコミンテルン、KGBの秘密工作の手法を知ることが不可欠だ」、と口を揃えるのです。

ですが、日本側のインテリジェンス関係者は、ソ連・国際共産主義の秘密工作に関する近現代史研究——これをインテリジェンス・ヒストリー、情報史学と呼びま

す——をほとんど知りません。日本には、情報史学の研究者がほとんど存在しないのだから、それも無理はありません。しかし日本が今後、対外インテリジェンス機関をつくって適切な運用をしたいと思うならば、情報史学は必要だと思います。

伊藤 亡くなった佐々淳行氏も、「インテリジェンスなき国家は滅亡する」と言っていました。

江崎 第二次安倍政権下では国家安全保障会議と、その事務局である国家安全保障局を創設し、外交、インテリジェンス、経済、軍事を総合的に考え、国家戦略を策定・実行する仕組みに変えました。

特にインテリジェンスを国策に活用する仕組みが確立されたことで、警察や公安調査庁だけでなく、防衛省、外務省、経産省などにおいても、インテリジェンスを担当する部署が拡大・強化されつつあります。例えば防衛省・自衛隊は、欧米諸国の軍のインテリジェンス部門と連携を深める一方で、専門の情報学校を創設し、インテリジェンスの観点からの近現代史研究を進めています。

伊藤 そうですか。安倍内閣はいいことをやっていたんですね。

江崎 中国などによる産業スパイ対策などもあって、欧米諸国と連携して各省がインテリジェンスを重視するようになったという側面も大きいのですが、大事なことは、伊藤先生もご指摘になっているように、内外情勢を見る視座、枠組みです。

戦前の日本は、日本共産党を徹底的に取り締まりましたが、世界恐慌や当時の日本政府の経済政策の失敗に伴い、知識人や軍エリートの間では、共産主義やソ連に共鳴する動きが強まり、反米親ソの流れが生まれてしまった。

インテリジェンスというと、国家機密を盗むスパイの取り締まりの話になりがちです。しかしソ連・国際共産主義の秘密工作を研究する欧米の情報史学の動向を見ると、経済・金融政策を担当する政府首脳のプローンやアカデミズム、そして世論を主導するジャーナリストらが主要な工作対象になっていますし、戦前の日本の歩みもそのような視座、枠組みに基づいて検証し直さなければならない。そうした情報史学に基づく近現代史研究を進めることで、スパイを取り締まったり、相手国の外交・軍事について調査・分析をするだけでなく、経済・金融政策への影響や、アカデミズムに対する外国の工作にも目を配るようになることが重要だと思うのです。

そうした情報史学による近現代史研究を進めていく上で、伊藤先生が築かれた近現代史研究は実に重要であり、心から感謝しております。

伊藤 これからも江崎さんに教わりたいです。

江崎 何をおっしゃいます。先生。

伊藤 本当にそう思っているんです。宮脇淳子さんと江崎さん。それに櫻井よしこさんははっきりした議論をする人だからね。本日は有難うございました。